

## 様式 4

令和元年度 日立市教育研究会先進校等調査派遣研修報告書

日立市立油縄子小学校 教諭 小木津 祐菜

- 派遣期日 令和元年8月20日(火)～8月20日(火)
- 研修先 学校名(会場名) 東京学芸大学附属大泉小学校  
所在地 東京都練馬区東大泉5丁目22-1  
<http://www.es.oizumi.u-gakugei.ac.jp/>

### 3 研修内容

#### (1) 視察校における研究への取り組み

研究のテーマ：IB教育の理念を取り入れた新しい教育課程の開発

～やりとり(使うこと)を通して、英語力をつけていく外国語活動・外国語の研究～

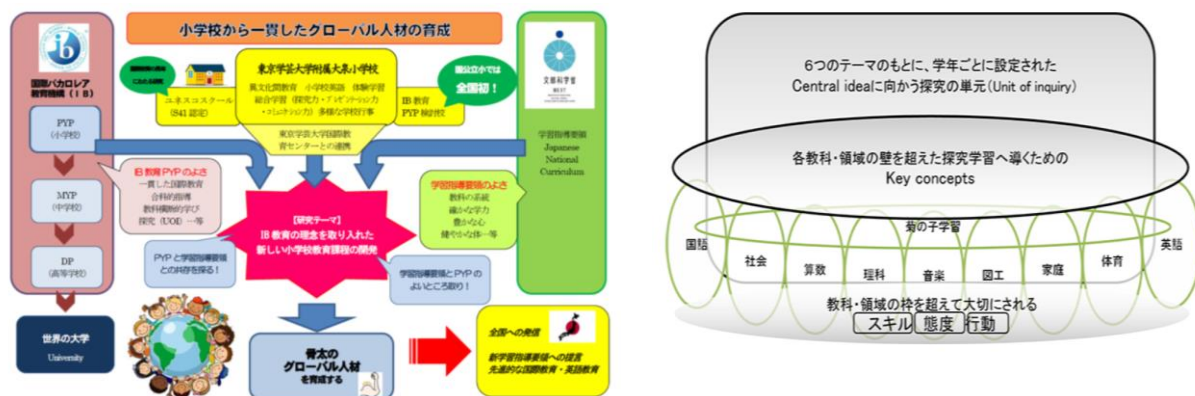
東京学芸大学附属大泉小学校では本テーマを受けて、外国語教育カリキュラムの研究と構想を継続して行っている。平成18年度からは「国際」をテーマに掲げ、「国際社会に生きる『豊かな学力』の育成」をテーマとした研究や、「グローバル社会に『生きる力』をはぐくむ」をテーマとした研究を積み重ねている。全教員で取り組む総合学習や日本語学習に加え、各教科部でも全体の研究テーマに沿って連携した研究活動を進めている。

#### ①大泉 PYP について

昨年度より、グローバル社会に生きる力を育むという主題のもと、「国際バカロレアの教育理念を取り入れた小学校教育課程の開発」に取り組んでおり、外国語教育や国際教育を通してグローバル人材の育成を目指している。国際バカロレアの理念に基づく教育を展開することで、児童が自然の流れでグローバル社会に生きる力を身につけるよう取り組むことができる。また、探究学習では、教科を融合した「UOI (Unit of Inquiry) 学習」を下図のようにとらえ、菊の子学習、特にフリースタイル学習などで実践を行っている。科目の枠を超えた体験型の活動が豊富である。1つのことに粘り強く取り組む力を身につけ、かつ問題を解決し、行動へ導くよう促している。他者と関わることで、話し合い活動が充実し、学ぶ力も育むことができる。

※国際バカロレア (IB) は、多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成を目的としている。

※PYP とは、3～12歳を対象に、精神と身体の両方を発達させることを重視しているプログラムである。



- やりとり(使うこと)を通して、英語力をつけていく外国語活動・外国語の研究について東京学芸大学の教授招き、定期的に講演会や指導講評をしてもらい、今後の外国語教育

の在り方について研修を行っている。児童に英会話ができるように教えたり、文法を理解させたりしていくのではなく、英語の力をつけていくために授業を工夫していきたい。我々大人が「できない」と思っている英語を「覚える」ではなく、「気づいたらとできていた」と思わせる英語の授業を行って行く。

## (2) 指定校における授業の実際

### ① 第3学年 外国語活動 Let's try! 1 Unit 4 「I like blue.」

本題材は、「好きなものを伝え合う」ことが中心となっている。日常生活の中では、好き嫌いを伝え合う場面は多く、児童にとっても身近に感じられる題材である。お互いに好みを伝える表現を知ることで、児童相互の関わりを増やすことができる。色やスポーツ、食べ物など児童にとって身近にあるものの好き嫌いを扱うので、相手に伝える活動を取り入れやすい題材である。また、デジタル教材やカードなど、視覚的な情報を活かしたり、歌やチャンツなどリズムを活かしたりする教材を使うことで、児童が外国語の意味や発音に自然と気づき、慣れ親しんでいくことができる。

### ② 第6学年 外国語活動 We Can! 2 Unit 2 「Welcome to Japan ～日本の文化～」

本題材は、児童が日本の文化について興味をもち、その良さを ALT や友達に聞いてもらうという活動が中心となる。普段日本の文化を意識して考えたり体験したりする機会が少ない児童が、日本の伝統的、文化的なものや行事などについて思い浮かぶことをマッピングする活動を通して、日本文化の良さを改めて感じるができる。また、話すことについては、ALT や友達に対して自分が本当に伝えたい、聞いてもらいたいことを伝えるため、より伝わりやすい言葉を選んだり伝え方を工夫したりなど、他者へ配慮しながらコミュニケーションを図る態度が育成できる。

## 4 感想

(1) 英語でのあいさつをするときに、無理に言わせるのではなく、HRT が世間話のように話しかけながら、英語の学習のスイッチを切り替えていた。児童が日本語で返してきても、英語を強制するような発言はをせず日本語や英語を織り交ぜながら話を盛り上げていた。何を、どの言語で話したいのか選択肢を与えることで、児童自身が「英語を話したい」と感じてから話すということを重要視していると感じた。

(2) HRT や ALT が何度も色に関する英語の歌を歌い、英語表現に慣れ親しませていた。英語の歌をよく聞かせるために、「聞こえてきた音」などを質問し、注目させながら聞かせていた。英語表現に十分に慣れ親しませることで、その後のアクティビティなどの活動に自信をもって取り組むことができる。また、「自分も歌ってみたい」と感じ一緒に歌ってみたり、何色の色が登場したのか数えてみたり、進んでヒアリングの活動を進めることができていた。なんとなく聞き取れた音として発語したり、自分の知っている英語の単語として発語したり、児童の得意な面を活かして活動することができていた。

(3) 単元を通したためあてやメインアクティビティが明確に示されており、目的意識をもって授業に参加する場の設定がされていた。3年生のクラスの旗を一人一人の好きな色を入れて作る活動では、自分が英語を話すことで一つのものが作り上げられる楽しさやすばらしさを感じている児童が多くみられた。「やってみたい。話してみたい」と思わせるような教材開発や発問の工夫が重要だということを感じた。